

第8回(2004年度)認定輸血検査技師試験の結果

1.受験者数

- ・申請者 290 名中、欠席者 15 名で、実受験者は 275 名であった。
- ・実受験者中、新規受験者は 134 名 (48.7%)、再受験者は 141 名 (51.3%) であった。

2.試験結果

1) 筆記試験	(2003年冬季)	2) 実技試験	(2003年冬季)
・最高点	80.7 (81.4)	・最高点	98.8 (99.0)
・最低点	39.5 (37.6)	・最低点	0 (0)
・平均点	61.7 (62.6)	・平均点	48.4 (57.2)
・中央値	62.1 (63.7)	・中央値	48.5 (60.0)

3.総合判定

- ・実受験者 275 名中、合格者は 75 名 (合格率 27.3%) であった。
- ・受験科目別受験者数 (合格者数、合格率%) は以下のごとくであった。
 - 筆記+実技：198 名 (34 名、17.2%)
 - 筆記のみ：42 名 (21 名、50%)
 - 実技のみ：35 名 (20 名、57.1%)

4.試験概要と成績について

1) 試験概要

2004 年度試験は、8 月 21~22 日、横浜市立大学医学部を会場に行われた。今回から既合格科目の受験が免除されたため、受験者は「筆記+実技」、「筆記のみ」、「実技のみ」の 3 グループに分れての受験となった。会場も全受験者を一度に収容可能な規模であったため、今年度は分割せず年 1 回の実施となった。

2) 試験成績

全体の合格率は 27.3% (75/275 名) で 2003 年冬季 (27.1%、36/133) とほぼ同率であったが、3 グループ間では上記のごとく大きな差異が生じた。即ち「筆記のみ」、「実技のみ」の受験者の合格率は高く、「筆記+実技」の受験者では低かった。

各グループの成績は下記のごとくであり、一科目受験者が不合格科目を克服した結果と思われた。参考までに「筆記のみ」の受験者の前回の筆記試験成績 (平均点) は 59.6、「実技のみ」の受験者の前回実技成績は 43.5 点であったことから、奮起の様子が見える。但し、「筆記+実技」の両科目受験者を対象とした場合、受験回数を重ねる毎に成績が低下する傾向にあり、漫然と受験しても合格し難いといえる。

	筆記のみ (筆記)	実技のみ (実技)	筆記+実技 (筆記)	筆記+実技 (実技)
最高点	78.6	98.8	80.7	95.2
最低点	49.0	4.7	39.5	0
平均点	63.5	65.0	61.3	45.4
中央値	64.8	68.0	62.1	43.3

5.試験科目別評価

1) 筆記試験

平均点 61.7 (中央値 62.1) は 2003 年冬季試験とほぼ同レベルであった。得点分布 (ヒストグラム) は正規分布を呈し、合格基準値以上の得点者は 37.5% (90/240 名) であった。問題は広範囲から出題されるので一夜漬け的な勉強では対応できない。A ランク領域は勿論、それ以外でも社会的に関心度が高いテーマに関してはきちんと情報・知識を整理して

おく必要がある。重要かつ基本的な問題は繰り返し出されるし、形式も〇×式、マルチプルチョイス、穴埋め、正誤、計算、臨床問題と大きくは変わっていない。今回も計算問題の正答率が不良で、白紙の受験者が散見されたが、輸血領域で要求される計算問題は限られているので、対策も立て易いではなかろうか。

2) 実技試験

平均点 48.4 (中央値 48.5) は 2003 年冬季試験に比し 8.8 点の低下であった。問題の量・質、及び評価基準に大きな変更は無い。得点分布は明らかに 2 峰性を呈し、成績良好群と不良群の境界が明瞭であり、後者が全体の成績の低下に関与していた。実技試験が不良であった 162 名中、72 名は 3 科目 (血液型、抗体、カラム) とも不合格、73 名は 2 科目不合格、17 名は 1 科目不合格であった。

血液型の平均正答率は 37.0% であった。大減点者で多かったのが正常検体を正確に判定できないケースで、それだけで実技試験は不合格である。中には「試験なので異常検体に違いない」との先入観から、自ら問題を複雑にしている受験者もみられた。判定そのものは正しいのに総合判定欄の記載が曖昧であったり、「？」などの記号を記載した受験者も同様の理由が背景にあったのかもしれない。また ABO 式血液型は記載しても Rh 式血液型結果を未記入とした受験者が散見された。血液製剤に関するコメントは臨床側が理解できるように、分かり易くかつ簡潔に記載する必要がある。理解しにくい内容や文字そのものが判読できない答案は受け入れられない。

赤血球抗体の平均正答率は実技 3 科目の中では最も良かったが、それでも 52.5% にすぎなかった。相変わらず検体取り違い、被験者氏名の誤記がみられた。白紙の答案や抗体の同定が全く出来ない受験者も散見された。既に科目は赤血球抗体解離同定とアナウンスしてあるので、十分な準備で試験に臨んで頂きたい。また抗体名も正しく記載しなければならない。

カラム凝集法の平均正答率は 43.7% で、前回に比しバラツキが少なくなった。得点分布はまだ 2 峰性で不得意の受験者がいるが、正解者も多くなり、カラム凝集法に慣れてきたためと思われる。ABO 式血液型、部分凝集は判定ミスも少なかったが、アンチグラムの読み方、抗体名の記載法に問題のある受験者が散見された。臨床問題も前回に比し正答者が多かった。